



## 光と影が凝縮された街、ムンバイ

ボンベイ日本人学校校長 舩屋 剛

### \*インドって…

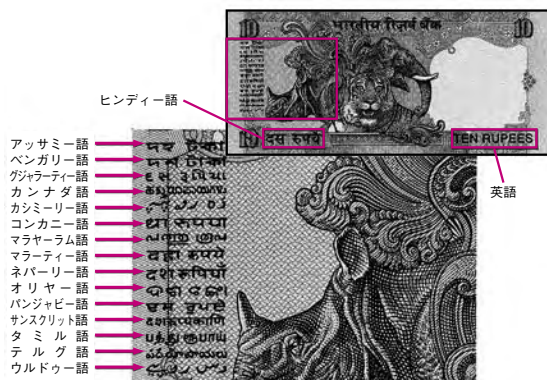
「赴任地はムンバイです。」と言われたとき、戸惑った。「ボンベイだよ。」と言われ、やっとわかった。インドでは、1995年に都市の名称をイギリス統治時代のものからインド由来のものへ改称していたのだった。チェンナイ（マドラス）、コルカタ（カルカッタ）などがそうである。

インドについてのイメージは、ガンジス川・ヒンドゥー教・カレー・サリーというものだった。もちろん、核保有国、巨大財閥、IT産業などの新しい情報も知っていたが、ODA（政府開発援助）を受けている開発途上国のイメージが強く、関心を持っていなかった。

### \*お札に描かれる17言語…

インドは、人口10億人（あくまで推定人口であり、実際はもっと多い）、7民族、その民族を中心とする28州と直轄地からなる国である。連邦公用語のヒンディー語、補助公用語の英語のほかに、憲法で21の言語が認められ、方言も844以上使われている。宗教も、ヒンドゥー教・イスラーム（イスラム教）・キリスト教・シク教・仏教・ジャイナ教などがあり、まさに多民族多言語多宗教の国家なのだ。

そのインドの多民族多言語性を象徴しているのが通貨だ。インドの通貨は、ルピー（Rupee）と補助通貨パイサ（Paisa）だが、ルピー札には17種類の言語で数字が記載されている。



17種類の言語で数字が記載されている10ルピー札

### \*生活のなかに根づく宗教…

多宗教国家であるインドでは、独立記念日・共和国記念日などのナショナルホリデーのほかに、ヒンドゥー教・キリスト教・仏教・イスラーム・パーシー教の宗教行事の祝日がちりばめられている。インドの人たちの生活は、とくにヒンドゥー教とその神によって規定され、太陽暦と太陰暦が併用されている。そのため、ナショナルホリデー以外の祝日は、ヒンドゥー暦に合わせて毎年曜日が変わる。

ヒンドゥー教の神を祝う日は、街中が祭りの雰囲気一色に包まれる。人々は街に繰り出し、一晩中爆竹や花火を打ち上げたり、大音響で祈りの音楽をならして踊り明かしたりと盛りあがる。色粉や色水を無礼講的に掛け合う色の祭り「ホーリー（Holi）」、古代インドの長編叙事詩『ラーマヤナ』に登場する神々が悪に勝利したことを祝う「ダシュラ（Dasara）」、街中をイルミネーションで飾り富と幸運の女神ラクシュミーを祝う「デワリ（Diwali）」が、ヒンドゥー教の三大祭りである。また、ガネーシャ・チャトゥルティーも盛大である。最終日、何万人もの人々が浜辺に集まり、ガネーシャ（象の頭をした神）の像を海に流し祈りを捧げる。この様子からも、いかに宗教が生活のなかに根付いているのかがわかる。

### \*過去と現在が混在…

ここムンバイは、西インド・マハーラーシュトラ州の中心地で、人口1500万を有するインド随一の国際貿易都市である。かつては漁民の暮らす7つの島からなる地域であったが、東インド会社管轄・イギリスの統治下で近代化が進められ、19世紀には7つの島を結合する埋め立て工事が完了、鉄道が敷設されると綿花の輸出港として発展した。インド独立運動の発祥の地でもあり、文化の発信地としての役割も果たしてきた。現在も街のいたるところにイギリス統治時代の建物が残り、それらは現在も庁舎・大学などとして使われている。一方、商業の中心地区では高層ビルが建ち並び一大オフィス街を形成し、過去と現在のコントラスト



壺割り祭りに興じる人々



イギリス統治時代に建てられた駅舎



雨季に冠水した市街の道路

がみごとに混在している。

ムンバイの都市圏はしだいに拡がり、高層マンション・巨大ショッピングモールの建設ラッシュが続いている。しかし、狭い地域に人口が集中しているため、物価や地価が激しい勢いで高騰を続けるという東京的状况も呈してきている。また、貿易港・鉄道の南北の起点でもあるため、外国やインド各地の州、また北部の農村部から流入してくる人々でごった返している。そのため、多民族多言語多宗教国家インドの縮図的な都市となっている。

### \*脱インド化を歩む街…

ここムンバイの街に住む人々は、自分たちのことを誇らしげに「ムンバイカー」とよぶ。高級車が走り、ボリウッド(ムンバイ映画)スターたちが行き交う街のなかでは、サリーやクルタなどの姿はあまり見かけられず、女性はパンジャビスーツ、ジーンズ、男性もスーツ、ズボン姿がほとんどである。しかし、郊外に出るとこの状態は逆転する。このギャップが、インドにありながらインド的ではないこの街の姿を象徴している。

また、在日印僑だった人たちが多く住み、日本企業も進出していることから、日本語を学ぶ人たちも多い。ニューデリー・マハラシュトラ州・ウェストベンガル州には多くの日本語教室が開かれ、毎年日本語スピーチコンテストが開催されるなど、日本人に友好的である。

### \*近代化に残される影…

近代化へ向けてまっしぐらに進んでいるこの街だが、いくつかの大きな課題を抱えている。

まず、インフラの整備である。①道路網の未整備による慢性的な渋滞の解消(雨季には冠水し凸凹状態になり、また幹線道路が少なく、郊外からの流入車両で溢れかえる道路)。②生活排水の処理、電力供給、生活

用水の確保(アラビア海に流れ込む生活排水、安定供給されない電力・生活用水)。

もちろん、連邦・州政府も改善のためのプロジェクト(自動車専用道路、地下鉄・近郊高速鉄道、上水道パイプラインの建設等)を毎年のように立ち上げているが、インド的なのか、いつまでたっても工事を続けている。

そして、教育保障と身分制度の解消も、大きな課題である。近郊の農村部から流入し、路上生活を送る人たちが数多くいるが、この人たちは、子どもたちが稼いでくるお金も一家の収入源としている。州政府は、義務教育の徹底・識字率の向上を訴えているが、この子どもたちへの教育保障はない。若年人口がしっかり国の底辺を支えているだけに、教育保障が発展の鍵を握っているともいえる。

また身分制度(カースト)は、この国の憲法規定上では認められていない。にもかかわらず、ヒन्दゥー教の教義とそれに基づく慣習、職業カースト(職業の序列を細かく規定している制度)の存在など、生活の奥底にまでこの制度が入り込んでいるために、その解消にはまだ多くの年月がかかりそうである。また、男尊女卑の家族観・結婚観(親が結婚相手を決める・女性の持参金制度)など女性の地位向上に向けての課題も横たわっている。

しかし、IT産業など新しい産業が生まれるのに伴って生み出される中産階級、そして産業構造の変化のなかで、古くからの社会構造は崩れつつある。この階層の増加とともに、社会意識の変革が緩やかに進められようとしている。

第3次産業の発展の中で輩出される中産階級層が多く住む一方、スラムや路上での生活者が街を行き交うムンバイは、インドの光と影が混在する街なのである。